

丘井の喩

—二鼠警喩譚—

東
洋
学
報

原 實

淨名經の七喩を始めとする仏典にみえ、二鼠警喩譚としては萬葉の昔より日本文学に引用され、又「井の中の男」(Der Mann im Brunnen, The Man in the Well, L'homme au puits) の寓話となつてはキリスト教聖者伝の装いの下に11世紀以降西欧に伝えられて、近くはロシヤの文豪トルストイの「懺悔」にも引用されたものに、ここに論述せんとする「丘井の喩」がある。既に今から100年前、ドイツの碩学 E. Kuhn は仏教、ジャイナ教、ヒンヅ一教にみえるこの喩の異同を論じ、傍ら中世ヨーロッパに伝わった一角獣物語の系譜を跡づけて研究史に一時期を画した。その後この喩の西欧への伝播の経路と普及は欧米学者の精細に研究するところとなり、それが明末の耶蘇会士 Matteo Ricci の著を通して平田篤胤の「本朝外篇」に知られていた事情も夙に村岡典嗣氏の指摘するところであった。第二次大戦以後この喩は、就中本邦に在って比較文学研究者の関心を集め、小堀桂一郎、松原秀一氏の論稿はこの寓喩の西漸の事情と、それが16世紀キリスト教伝道師と共に再度東漸し、本邦の南蛮文学に痕跡と留めるに至った経緯を詳細且つ明快にわれわれに提示している。翻ってインド学の研究史を顧みると、先づ M. Winternitz はこの寓話の Mahābhārata (MBh.) XI. 5-6 に Vidura の口を借りて語られている事実に着目し、これを典型的 Asketenpoesie の一に数えた。MBh. と仏典との間には、この寓喩の細部に異同があるが、仏典にみえる「丘井の喩」が Nāgārjunikonda の彫刻に具象化され、而もそれが Piṅḍola (寶頭盧) と Udayana (優陀延) の故事を描いたものであったことは J. Ph. Vogel の指摘するところとなった。近時 É. Lamotte が維摩經のフランス語訳を公けに及び、この喩の研究史を列举して研究者に多大の便宜を提供した。本邦に於いても MBh. XI. 5-6

第
六
十
六
卷

五
八
〇

は孟蘭盆経との連関から池田澄達氏の注目するところとなり、同氏はこの部分を邦訳して解説している。⁽¹⁵⁾

このような数奇な運命を担い、且つは複雑な歴史的背景をもつ「丘井の喩」を総合的に論ずることはもとより本稿の能くするところでない。以下に論述するところは、この寓喩を今一度 MBh. XI. 5-6 に即して検討し、その間に現われ来たる幾つかの問題を論じようとするに留まる。但し本論に入る前にこの喩の位している MBh. XI. 5-6 が如何なるものであるか明らかにして置く必要があるであろう。

MBh. XI は Strī-parvan (婦女の巻) と称せられ、MBh. の大戦争の終結直後に位している。この大戦争の結果 Pāṇḍava と Kaurava 両軍の将兵は殆んど戦死し、婦女子は古戦場に来て戦死した縁者を弔うが、それに先立つ巻頭の諸章は Kaurava 軍の総師 Duryodhana の戦死を悲しむ父王 Dhṛtarāṣṭra に輪廻の理を説いて慰める Vidura の教えを載せている。この両者の質疑応答の展開は後者をしてこの「丘井の喩」を語らしめることとなるが、以下に先づ当該部分を Poona 批判版に拠って訳出する。

I

ヴィドラは言った。

「自生者に敬礼なし、この点について私は貴方に語って進ぜよう。⁽¹⁶⁾ 一体卓れた仙人達がこの生存の深みを如何様に語っているかを。…(2)

或るバラモンが広大な荒野の中に在り、⁽¹⁷⁾ 偶々巨大な猛獣達の群がる、越え難き森 (vana) にさしかかった。 ……………(3)

(彼ら猛獣は)いとも怖しく、且つ大食いで獅子、虎、象の形を取り、八方にたむろして、その森は死神にさえ恐怖を催させるものがあつた。 ……………(4)

それを見ると、彼の心臓はいたく戦慄し、身毛は豎立し、感情は千々に乱れた。噫、敵を悩ます者よ。 ……………(5)

一体どこへ行ったら助かるものであろうかと、彼は八方を見廻わしながら、その森を徘徊し、又此方彼方に走り廻つた。 ……………(6) 彼は猛獣達の間を覗いながら、恐怖に駆られて走つたが、所詮彼は遠

くまで逃げおさせたわけでもなく、又彼らから自由になったわけでもなかった。……………(7)

ところで、よくよくみると、この怖い森（自体）が一面網をかけられていて、しかも極めて怖い一人の婦人が両腕でこの森を抱えているのに気がついた。……………(8)

又、この森を囲む、山のように高く聳え、天にも届かうとする大木は、五つの鎌首を上げた蛇達に他ならなかった。⁽¹⁹⁾……………(9)

さて、この森の中には井戸(udapāna)⁽²⁰⁾があったが、草葉に被われた葛がそれと判らぬように絡んで、その井戸を蔽っていた。⁽²¹⁾……………(10)

かのバラモンは、このそれと判らぬ井戸に落ちたが、彼は（途中で）葛が幾重にも絡まった狭路にひっかかった。……………(11)

恰度、ばらみつ(panasa)の大きな実が茎にひっかかっているように、彼は足を上に、頭を下にしてそこに宙吊りとなった。……………(12)

よく見ると、しかし、そこには今一つもっと大きな災厄が彼を待ちかまえていた。⁽²²⁾(……)、井戸の縁石の辺に彼は一頭の大きな象を認めたのである。……………(13)

六つの口を有し、黒ぶちで、十二の足で歩み、のっしのっしと葛木に絡んで、(井戸の)周囲を廻⁽²³⁾っていた。……………(14)

ところで、彼が(葛)木の枝に逆吊りになっていると、その小枝の間には、怖い形相なして恐怖を催させる、各種各様の蜂が群っているではないか。彼らは先刻より巢のところでしきりに蜜を造っている。……………(15)

噫、バラタ族の雄牛よ、幼童ですら（その味を知れば）飽きない、この生類にとって美味なる蜜を、彼らは懸命に造っている。……………(16)

すると、その蜜は條となって滔々と流れ出す。かの男は宙吊りの姿態のまま、この流れにありついてしきりに飲む。逼迫せる状況下でも彼はこの蜜を飲む限り、その喝の曾って停まることがなかった。…(17)

常にそれを求めて、彼はいつまでも飽きない。王よ、(先刻まで抱いていた)彼の生きることへの絶望観(nirveda)はすっかり消えてしまった。……………(18)

この男の、生への果かなき望みは唯この一点にのみ集中して支えを得

ていた。(ところが)黒と白の鼠がその木(の根かた)を嚙っている。
(19)
 森(vana)の難所のはずれに猛獣(vyāla)数多あり、(森を抱いては)怖しき婦人(stri)あり、井戸の下には蛇(nāga)あり、(上方の)縁石には象(kuñjara)がいる。.....(20)
 そして第五の恐怖(生命の危険bhaya)として鼠(mūṣaka)あり、彼らは木を倒そうとしている。そして蜜を食ばる故に蜂(madhukara)による第六の恐怖(bhaya)ありと人々は言う。.....(21)
 斯く彼は輪廻の海に投げ出されて生を営み、生きることに果かなき望みを托して、それに絶望することもない。.....XI. 5 (22)

ドリシュタラーシュトラは言った。

「何と、この男は大なる苦痛を嘗めて不如意な生き方をしていることか。説話者中の最勝者よ、如何にして彼はここに悦びや満足を見出すことがあろうか。.....(1)
 ところで、この男が善業の逼迫状態(法への峽路? dharmasamkṛta)に於いて暮している所は何処であり、又如何にしてこの男はこの大なる生命の危険より脱し得るのか。.....(2)
 その凡てを我に語り給え。われらの正しき身の処し方を。というのも、この男を救い上げ度いものと、我に憐憫の情抑え難いものがあるから。.....(3)

ヴィドゥラは言った。

王よ、解脱を知っている人達はこれを譬喩として語っている。人間が来世に善き帰趨を見出すようにと。.....(4)
 かの大なる曠野(kāntāra)といわれたものは輪廻(saṃsāra)に他ならない。又峻粗な森(vana)とは輪廻の深み(saṃsāra-gahana=この世の生存)のことである。.....(5)
 猛獣(vyāla)とは諸病(vyādhi)の謂であり、その森に宿る大軀の婦人(nāri)は容色を減する老(jarā)であると賢者達は言っている。.....(6)

ところで、王よ、森の中の井戸 (kūpa) は身体を有する者達の身体 (deha) であり、井戸の下に住んでいる大蛇 (mahāhi) は一切生類を滅し、身体を有する者達から一切を奪い行く時間 (kāla=死) に他ならない。……………(7)

そして井戸の中にはびこり、その男がその枝にひっかかっている葛 (vallī) は身体を有する者達が (ひとしく) 抱く、生への一縷の望み (jīvitāsā) である。……………(8)

ところで、井戸の縁石のところその(葛)木の周りを徘徊している六口の象 (kuñjara) は、王よ、歳 (saṃvatsara) であると伝えられる。六(口) (mukha) は(六)季 (ṛtu), 十二足 (pāda) は(十二)ヶ月 (māsa) の謂である。……………(9)

一方、しきりと木(の根)を噛っている(黒と白の)鼠 (mūṣaka) は生類にとって夜と晝 (rātry-ahas) であると思慮ある人々は言っている。そして又そこに群っている蜂 (madhukara) は諸々の欲望 (kāma) であるといわれている。……………(10)

そして蜜を滔々と流している條 (dhārā) はこれら諸欲の味わい (kāma-rasa) であると知るべきで、そこに人間共は耽溺⁽²⁴⁾している。……………(11)

輪廻の輪 (saṃsāra-cakra) の廻転は実にこのようなものであると知る人達は賢者であり、彼らはこの輪廻の輪の桎梏を絶ち切るのである。……………(12)

上に訳出を試みた MBh. XI. 5-6 の「丘井の喩」は維摩経その他仏典の伝えるものと些か趣を異にするとはいえ、諸苦逼迫して命旦夕に迫りながら、欲に溺れて死の恐怖を忘れる凡夫の姿を丘井を舞台に比喻を以って説く点は一致し、それらが凡て同一起源のものであることを示している。浄名経七喩の如く必ずしも整理されておらず、能比と所比の対応も常に必づしも明瞭でないが、この Vidura の物語 (XI. 5) と寓喩 (XI. 6) との対応関係を検べてみると、それらは次の十一項目に分類され得る。

- (1) kāntāra (曠野) saṃsāra (輪廻)

(2) vana	(森)	saṃsāra-gahana	(輪廻の深み)
(3) vyāla (pl.)	(猛獸)	vyādhi (pl.)	(病)
(4) stri	(女)	jarā	(老)
(5) kūpa	(井戸)	deha	(身体)
(6) nāga	(蛇)	kāla	(時, 死)
(7) latā (valli, vṛkṣa)	(葛)	jīvitāśā	(生への望み)
(8) kuñjara	(象)	saṃvatsara	(歳)
(9) mūṣaka	(鼠)	rātry-ahas	(晝夜)
(10) madhukara (pl.)	(蜂)	kāma (pl.)	(欲)
(11) madhu	(蜜)	kāma-rasa	(欲の味わい)

さてこれら11項目を仔細に検討してみると、先ず(1)曠野(=輪廻)と(2)森(=輪廻の深み、即ち現世の生存)という舞台設定を別とすれば、それ以外の9項目は次下の如く二大別される。

その中の第一 Group は既に MBh. XI. 5. 20-21 に述べられている「六つの大恐怖、若くは生命の危険 (bhaya)」に相当している。即ち上表の(3)猛獸(=病)、(4)女(=老)、(6)井戸の下の蛇(=kāla)、(8)井戸の上の象(=歳)、(9)葛を噛む鼠(=晝夜)、(10)蜂(=諸欲)で、それらは悉く人間の生命を時々刻々蝕んでいるものに他ならない。しかし、この六の中でも(6)蛇(=kāla)は別格に位している。何故なら(8)象(=歳)にしても(9)鼠(=晝夜)にしてもそれらは所詮 kāla (時間)の異なる現象形態に過ぎず、実質的には共に(6)の中に包摂さるべき概念である故である。のみならず kāla には「時間」の義の他に「死」をも意味しているから、この視座に立てば(3)の病、(4)の老、(10)の諸欲も生命をすりへらすものとして、(6)の kāla の補助手段にすぎないこととなる。鼠が葛を噛り終える時、彼は生への一縷の望みを断たれて真逆様に転落し、蛇に噛まれて命終するから、結局この喩では kāla が主役で、他は凡て脇役ということになる。

これに対して第二の Group は上記の 6 bhaya 以外のもので、(5)井戸(=身体)、(6)葛(=生への望み)、(11)蜜(=諸欲の味わい)がその中に

含まれる。それらは第一 Group の消極的否定的概念に対蹠さるべき積極的概念で、且つは凡夫を迷わす原動力である。

さて、このように見る時、(5)の井戸には積極性が期待されることとなるから、丘井は元来仏典にみられるように救い、避難の場でなければならず、⁽²⁶⁾誤ってそこに⁽²⁷⁾転落して倒懸の姿態をとるが如きは寓喩本来の構図でなかったと思われる。而して蛇(=kāla)が第一 Group で主役をなしていたように、この第二 Group では(5)丘井(=人身)が中心的地位に在ったに相違なく、ここに丘井と蛇との密接な⁽²⁸⁾関係が浮かび上がってくるであろう。しかし、丘井を転落の場でなく救いの場となすのは何とも不自然で、⁽²⁹⁾仏典の寓喩にもなお問題が残るように⁽³⁰⁾思われる。

ところで上述の MBh. XI. 5-6 と漢訳仏典を比較してみると、ヒンズー教の「丘井の喩」と仏典のそれとの相違は大略以下の如くとなる。

第一に、先ず上に言及したように仏典に於いては主人公の人乃至囚人は狂象に追われて丘井に拠るから、それは避難の場であって MBh. の如く誤って転落する場ではない。

第二に、第一と直接連関して彼は意図的に丘井に降りたからその姿態は頭を上にした懸垂のそれで、MBh. の如き倒懸のそれではない。その懸垂の姿態は Piṇḍola(賓頭盧)の故事に取材した Nāgārjuni-konda の彫刻によっても具象的に立証⁽³¹⁾せられる。

第三に、丘井の下なる大毒龍に加えて仏典は四方に毒蛇を配し、それらは「四大」に喩えられ、それが、MBh. XI. 5. 9 に言及される nāga (pl.) に呼応を見出す如くであっても、MBh. は寓喩の形で複数の蛇に言及することはない。

第四に、MBh. で老(jarā)を象徴している怪女(stri)は仏典にみえず、その替りに賓頭盧突羅闍為優蛇延王說法経と仏説譬喩経は「野火」を立てる。そしてこの野火は前者では「老」、後者では「老と病」を象徴している。但し註維摩、⁽³²⁾経律異相、衆経撰雜譬喩にこの「野火」は現⁽³²⁾われ⁽³²⁾ない。

第五に、井の上なる象は仏典で「無常(anityatā)」を象徴し、MBh.

の如く六面，十二足などといわれることがない。但しこの6，12の数詞は MBh. XI. 5. 9 にみえる5と共に，維摩經のそれ（六界，十二處，⁽³³⁾五滯）に遠き呼応を見出す如くである。

第六に，井の下なる毒龍は賓頭盧突羅闍(34)為優蛇延王說法經と仏説譬喩經では「死」，衆經撰雜譬喩では「地獄」，維摩經では「惡道」(durgati)を象徴している。MBh.で kāla を象徴していたのと比較する時，この語の「時間」の意味合いが漢訳仏典に伝えられなかったことを窺い知ることができる。

概して仏典では井の上の象 (=無常)と井の下の龍 (=死 etc.)による挿み討ちを主として，傍らに蛇その他を配する構図を取り，より整理された型を示しているように思われるが，これによって MBh. と仏典の寓喩の成立の前後を論ずることは必づしも容易でない。

II

斯くの如く MBh. XI. 5-6 に述べられる「丘井の喩」は仏典のそれと趣きを異にするが，その由って来たる所以のものは何であったか。その形成に直接資したか否かを審かにし得ないとしても，次下に述べる Jaratkāru 物語 (MBh. I. 13 及び I. 44 ff.)，Uttāṅka 物語 (I. 3)，それに「断崖にかかる蜜」の喩の三者は，部分的に少なくともこの「丘井の喩」への類似を示している。

(1) Jaratkāru 物語。

結婚して男子を儲け，子孫を絶やさぬことが父祖を助ける道であるとして結婚生活を賞揚したこの物語は孟蘭盆經との関連からしばしば本邦学者の注意を惹いているが，「丘井の喩」とそれとの関係は夙に E. Kuhn の指摘したところであった。⁽³⁶⁾問題点は直接原典に拠った方がより明瞭となるから，以下 MBh. I. 41 の関連部分を訳出することとする。

恰度，時を同じくして，一方かの大苦行者 Jaratkāru 仙は大地をくまなく遍歴していた。日が落ちればどこでもその場に休んで。……(1)

大なる氣力を有せる彼は，凡人には行じ難い誓行を行じながら，めで

たき聖地に沐浴しては遍歴を続けていた。……………(2)

霞を食らい、食を断ち、聖仙は日々その身を枯渇せしめていたが、たまたま父祖達が穴 (garta) の中で頭を下にしてぶら下っているのを彼は見た。……………(3)

彼らは Virāṇa 草の房に擱まっていたが、その房も今や一本の繊維 (tantu) を残すのみ。その繊維を穴 (bila) に住む一尾の鼠 (ākhu) がゆっくり取って (噛って) いる。……………(4)

食べ物とてなく、痩せ細り、穴の中で苦しみ、救いを求めて哀れな彼らに近づくと、自らも哀れになって、彼は彼らに次のように話しかけた。……………(5)

「貴方がたはどなたですか。Virāṇa 草の房に擱まって倒懸の姿勢でいられますが、穴に住む鼠がその根を噛って、房はもうすっかり弱くなっています。……………(6)

Virāṇa 草の房は今や一根 (mūla) を残すのみ。それをこの鼠が鋭い歯で少しづつ噛っています。……………(7)

残りが少いので、これも間もなく (鼠が) 切ってしまうでしょう。そうすれば貴方がたはこの穴の中に頭を下にして落ちてしまいます。」……………(8)

苦行者は己が苦行の功德 (tapas) の四分の一、三分の一、半分、否その凡てを捧げて彼らを救わうと申し出るが⁽³⁸⁾、彼らは tapas の無効を説く。彼らはこの行者 Jaratkāru の父祖達に他ならなかったが、それと知らぬ顔をして彼らは Jaratkāru の苦行への貪欲 (tapaso lobha. 19, tapo-lubdha. 25) を非難し、現在の悲惨が彼の結婚を顧みないことに由来すると説く。一縷の繊維 (tantu) こそは Jaratkāru その人に他ならず、彼一人が彼らの地上に残る唯一の縁者 (kula-tantu)⁽³⁹⁾ で、kāla を象徴している鼠がこの愚かな行者を今や断ち切らうとしているのだという。独身主義の沙門道を排して、家系 (kula-tantu, 21, kula-stamba. 22) の存続 (saṃtāna, 13, saṃtati. 28) を賞揚するこの物語はそれ自体興味ある問題を含んでいるが、⁽⁴⁰⁾ 当面の「丘井の喩」との連関から、唯ここで穴に倒懸 (adhomukha) の姿勢で草の房 (stamba) に拠り、而もそれを一尾の鼠が噛って今や一繊維 (tantu)、一根 (mūla)

を残すのみという状況設定が注目されねばならない。舞台は井戸 (kūpa, udapāna) でなく穴 (garta. 3, 5, 8, 20, 21; bila. 4, 6) であり、葛 (latā) の替りに Viraṇa 草の房が現われ、⁽⁴¹⁾ 鼠も二尾でなく一尾、倒懸の人も一人でなく複数となっはいるが、倒懸の姿態で転落の危機に在る設定に、両つの喩に共通点を見出すことが可能である。

(2) Uttāṅka の地界遍歴物語 (MBh. I. 3)。

鼠ではないが、夜と晝を象徴する黒白の糸 (tantu), 6(季), 12(月) 等の数詞は有名な Uttāṅka の蛇界遍歴物語にみえる。⁽⁴²⁾ 師の妻のために Pauṣya 王の妃より一對の耳飾りを受けた Uttāṅka は帰途に変装した蛇王 Takṣaka にその耳飾りを奪われる。逃げる Takṣaka を追って穴 (bila) に入った Uttāṅka は蛇王によって地下の蛇界に導かれ、そこで彼は織機 (tantra) の光景を見た。本文は MBh. に数少い散文部で I. 3. 147-177 にわたるが、師弟の間答の中より関連部分のみ以下に訳出する。

そこで, Uttāṅka は師に挨拶した。師は彼に答えて言った。「いとしき Uttāṅka よ, よく帰って来た。でも随分遅かったが」と。 …(165)

Uttāṅka は師に答えて言った。「師よ, 蛇の王 Takṣaka が仕事の邪魔をしたのです。彼によって私は蛇界 (nāga-loka) に連れて行かれました。 ……………(166)

そこで私は二人の婦人が織機の上で布を織っているのを見ました。その織機の上には黒と白の糸がありましたが, それは一体何なのでせうか。 ……………(167)

又, そこには12本の輻のついた輪 (cakra) がありました。六人の童子がそれを廻していました。これ又何のことでせう。 ……………(168)

一人の男がそこにいましたが, 彼は一体何人なのでしょう。 (169)

Uttāṅka は更に巨軀の馬, 雄牛を見, 又命ぜられるままに牛糞を食したが, その意味を師に問う。師は順次解答を与える。

「……かの二人の婦人は造物主 (dhātṛ) と (運命の) 分配者 (vidhātṛ) である。又, 黒と白の糸は夜と晝である。 ……………(172)

又, 六人の童子が十二本の輻のついた輪を廻しているといったが, そ

れらは六季、輪は歳である。又、一人の男は雨神 (parjanya) に他ならない。……」……………(173)
 丘井の喩とは異って、黑白は糸の色となるが共に晝夜を象徴し、六と十二の数詞は歳 (saṃvatsara) ⁽⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁾ ⁽⁴⁵⁾ ⁽⁴⁶⁾ にかかわっている。この他 360 (日)、24 (半月 parvan=12ヶ月) の数詞も同一文脈に現われる (I. 3. 150) が、穴 (bila, 137-138) に沿って降りた龍界 (nāga-loka) の光景がここに描かれて、丘井の寓喩に遠い呼応を示しているように思われる。

(3) 「断崖にかかる蜜」の喩。

しかしながら、上述の二つの寓喩以上に重要なものに、次下に論ずる「断崖の蜜」⁽⁴⁷⁾ の喩がある。この喩と丘井の喩との関連は近時 G. Artola の指摘したところ⁽⁴⁸⁾ で、前者は後者の原型となっているように思われるが、それと等しく重要なことは、この喩が同じ Vidura の口に語られて、Dhṛtarāṣṭra に聞かせる形を取っている点である。Vidura は MBh. V. 62. 21 以下にこの喩を用いて、戦火を交えんと血気にはやる Duryodhana の父 Dhṛtarāṣṭra に、息子をしてこの暴挙を思い留まらすよう忠告する。然るに、Dhṛtarāṣṭra は Vidura の忠告を無視して息子の意を容れたから、ここに大戦争は開始され、結果は息子 Duryodhana の死という老王の悲劇となった。Saṃjaya は MBh. XI. 1. 29-30 で往時の Vidura の忠告を老王に想起せしめ、この喩に言及する。一方、Vidura は XI. 2 以下に登場して、諸行無常の理を説いて老王を慰め、老王に問われるままに、随時丘井の喩 (XI. 5-6) に言い及ぶ形を取っている。その経緯は更に次節に述べることとして、ここでは先ず「断崖の蜜」の喩を MBh. V. 62, 20-27 によって窺い知ることとする。

ヴィドラは言った。……

「今一つ私は、曾って山上で経験したことを語って進ぜよう。クル族の後裔よ、それを聞いたら、より善きよう処し給え。……………(20)
 われわれは山男 (Kirāta) と一緒に高い山に登った。そこには、神にも等しいような、各種呪法や薬呪を事とするバラモン達も同行した。
 ………………(21)

それは一面林のような, Gandhamādana (香醉) という山で, 薬草は
 燐光を発し, Siddha や Gandharva (という天人達) の訪ねる山であ
 った。……………(22)

この山で, われわれは蜂のつくったものではない, 黄金色の蜜を眼に
 した。それは峻しい岩山に据えられ, 瓶ほどの大きさであった。(23)
 毒蛇達が守護し, Kubera 神のこよなく賞でるところで, それを口にす
 れば人間は不死となり, ……………。(24)

盲者は視力を恢復し, 老人も若返ると彼ら薬呪を執行するバラモン達
 は語っていた。……………(25)

すると, 王よ, 山男達はそれを見て, 欲しくなり, 却って蛇のたむろ
 する峻しい谷底に転落して身を滅ぼした。……………(26)

ところで, 汝の息子が(親族と戦って)大地を独り占めしようとする
 のはまさにこのようなものである。彼は愚かさの余り, 蜜を見て断崖
 を見ないのである。……………(27)

蜜に眼が眩んで断崖という危険を見ず, 拳句の果ては蛇の待ち構え
 る谷底に転落するとすこの比喩が丘井の喩の塑型であることは明
 らかである。断崖が丘井⁽⁵⁰⁾となり, 危険が寓話的に敷衍されれば, それ
 はそのまま丘井の喩となる故である。

一方, この喩を用いて大戦前に老王を忠告した Vidura の予言は的
 中して, 老王の悲劇となったが, 大戦後, 悲嘆に暮れる Dhṛtarāṣṭra
 に Saṃjaya は以前の Vidura の忠告を想起せしめて次のように言
 う。

「息子への溺愛より, 彼の好きなように進んでさせた貴殿は, 今斯く
 後悔するものの, もともと悔む資格がない筈である。……………(29)

蜜のみを見て, 断崖を見ない人は, 蜜への貪りの故に身を滅ぼして,
 恰度貴殿の如くに悔み悲しむのである。」……………XI.1. (30)

上の MBh. V. 62. 27 と XI. 1. 30 の両者を比較してみると, 略々
 同一文によって語られる「断崖の蜜」の喩は, 大戦争を間に挿んで相
 呼応し, 老王 Dhṛtarāṣṭra に忠告の形で語られていることが明らか
 となる。忠告者 Vidura は MBh. XI. 2. 1 以下に登場して, 会話は自
 然の展開をみせ, 随時 XI. 5. 1 以下の丘井の喩に連なって行く。MBh.

XI. 5—6 のこの丘井の喩をそれだけ切り離さないで Striparvan 全体の文脈に置いてみる時、それが「断崖の蜜」の喩と有機的に連関していることが知られるであろう。

(4) その他。

丘井の喩が余にも有名であるために、しばしばそれは MBh. XI. Striparvan 全体の文脈より抽出され、独立に論じられる嫌いなしとしない。この丘井の喩を説く MBh. XI. 5—6 に先行する XI. 1 に、その塑型となっている「断崖の蜜」の喩が語られ、それが又 MBh. V. 62 に呼応していた事情は上にみた通りである。同じような視点から Striparvan を読む者は XI. 5 の直前の XI. 4 に「倒懸」の表現のあることに気づくであろう。MBh. XI. 5 はこれに先立つ XI. 4 に述べられる「輪廻の深み (=現在の生存 saṃsāra-gahana XI. 4. 1, XI. 5. 2)」を敷衍したもの (vistaraśaḥ……praśaṃsa me XI. 5. 1) とされるから、この相前後する二章が全く無関係であるとは思われない。丘井の喩の語り手である Vidura は MBh. XI. 2 以後より登場して、息子の死を悲しむ Dhṛtarāṣṭra に世の無常、運命 (kāla) の力、業 (karman) の力、更には武人の戦死の功德を説いて老王を慰めるが、XI. 4 に到って人生の苦に触れ、生苦、老苦、死苦を説く。ところでこの生苦にまつわって、彼は XI. 4. 2 に於いて所謂「胎内の五位」の一つである kalala (迦羅羅⁽⁵²⁾) に言及し、更に月満ちて母胎より胎児が出ようとする時、それは足を上にし (ūrdhva-pāda), 頭を下にして (adhah-śiras) 陰門 (yoni-dvāra) に近づくといい (XI. 4. 4—5)⁽⁵³⁾。

「懸垂」のみを述べる仏典の丘井の喩と対蹠的に「倒懸」を説く MBh. XI. 5—6 のそれは、それに先立つ MBh. XI. 4. 4 の胎内の胎児の「倒懸」の姿態と無関係であろうか。但し、筆者はこれ以上自らの見解を支持する文献上の証拠を有たないから、上述の指摘以上に出ることは出来ない。

蓋し、丘井の喩といい、又西洋に伝わった一角獣の物語といい、そこには一種のエロティックな雰囲気漂うように思われる。Jaratkāru の父祖は穴に在って彼に妻を娶るべきことを奨め、草に蔽れて⁽⁵⁴⁾

それと知らず誤って井戸に落ちるとは、愛欲の迷いを想起せしめるものがあり、倒懸が胎児の姿勢であったことを知る時、この世の生存 (samsāra-gahana) の原動力に愛欲の惑いを見ることが不可能であろうか。しかし、これより先は思弁の領域に属するから、ここではただ解釈の可能性を指示するに留める。

註

- (1) 大鹿実秋「維摩経に見られる譬喩について」『金倉圓照博士古稀記念論集』(京都, 昭41), pp. 398 ff.
- (2) 村岡典嗣「二鼠譬喩談と平田篤胤」『文化』第一巻, 第二号(昭9), pp. 102 ff.
- (3) E. Kuhn, "Der Mann im Brunnen," *Festgruss an Otto von Böhltingk* (Stuttgart, 1888), pp. 68-76.
- (4) J. Ph. Vogel, "The Man in the Well and some other Subjects illustrated at Nāgārjunikonda," *RAA*. XI (1937), pp. 109-115.
- (5) L. Renou, *Anthologie Sanskrite* (Paris, 1961), pp. 107-109.
- (6) Cf. J. W. de Jong, "The Discovery of India by the Greeks," *AS*. 27 (Bern, 1973), pp. 138-142.
- (7) 原久一郎訳(岩波文庫) pp. 31-33, 木村彰一訳(世界文学大系, 84, 筑摩書房, 昭39), pp. 192-193.
- (8) Cf. W. Rau, *Indiens Beitrag zur Kultur der Menschheit* (Wiesbaden, 1975), p. 41. 尚, アラビヤに伝わったものとしては「カーラとティムナ」(菊地淑子訳, 平凡社, 東洋文庫 331, pp. 41-44) 参照。
- (9) E. Kuhn, *op. cit.*
- (10) 村岡典嗣『前掲書』。新修『平田篤胤全集』第七巻, (名著出版, 昭52), pp. 25-26 参照。
- (11) 小堀桂一郎「日月の鼠」『比較文化研究』15(東京大学教養学部, 1976), pp. 47-100. 松原秀一「中世の説話」(東京書籍, 昭54), pp. 97-127.
Cf. also, S. Thompson, *Motif-Index of Folk-Literature*, 1861. 1 (Bloomington & London, 1966, 2nd ed., vol. 4, p. 60).
- (12) M. Winternitz, *Geschichte der indischen Litteratur* (Leipzig, 1908) I, pp. 351-352, and *Some Problems of Indian Literature* (Calcutta, 1925), pp. 28 ff.
- (13) J. Ph. Vogel, *op. cit.*

(14) E. Lamotte, *L'Enseignement de Vimalakīrti* (Louvain, 1962), pp. 135 ff.

(15) 池田澄達「マハーバーラタとラーマーヤナ」(日本評論社, 昭19), pp. 186-210.

尚, ジャイナ教の伝承には E. Kuhn 言及の *Sthavirāvalīcarita* の他, *Vasudevahiṇḍī* (Bhavnagar, 1930) vol. 1, p. 8 が参照されるべきである。

Cf. also J. Jain, *The Vasudevahiṇḍī* (L.D. Series 59, 1977), pp. 560-561, and "The Importance of Vasudevahiṇḍī," *WZKS* 19 (1975), pp. 113-4.

(16) *atra te vartayiṣyāmi* は古譚の導入部として定型句となり叙事詩にしばしば現われる。

MBh. 3.10.6, 3.181.10, 12.19.10, 12.20.2, 12.64.10, 12.79.9, 12.125.8, 12.223.2, 12.260.4, 12.263.2, 12.264.2, 12.277.2, 12.279.3, 12.310.10, 13.10.3, 13.11.2, 13.40.2, 13.58.32, 13.100.2, 13.107.4, 13.118.6, 14.11.6.

より一般的には *atrāpy udāharantīmam itihāsam purātanam* が用いられる。但しこの *atra te vartayiṣyāmi* が MBh. 3, 12-14 巻にのみ現われることは注目すべきである。

(17) *samsāra-gahana* という合成語は MBh. XI.3.16, XI.4.1, XI.6.5 にもみえる。ここに *samsāra* は「輪廻」というより特定の生存状態を意味し (cf. XI.4.6: *tasmān muktaḥ sa samsārād*…), *samsāra-gahana* は就中現世の生存状態を指示しているように思われる。尚, 同類の *dharmā-gahana* という合成語は MBh. XI.5.1 にみえる。

(18) Poona Critical Edition は *mahati samsāra* と読むが, Bombay 版の *kāntāra* の読みを取る。Cf. MBh. XI.6.5 (*kāntāraṃ mahat*)。

(19) この頌は写本によって伝えないものがあり, 事実「五頭の蛇」は MBh. XI.5-6 に在って能比の役割を果していない。もと漢訳仏典の「五毒蛇」(註維摩)に相当していたものが脱落したものかとも思われる。

(20) For *udapāna* (Skt. and Pāli), *udupāna* (Aśokan inscriptions and BHS.), *dupāna* (Pkt.), and its relation to *kūpa*, cf. K. R. Norman, "Lexical variation in the Aśokan rock edicts," *TPS*. 1970, p. 124.

(21) *vallī* (XI.5.10, XI.6.8), *latā* (XI.5.11), *vallī-vṛkṣa* (XI.5.14), *vṛkṣa-śākhā* (XI.5.15), *vṛkṣa* (XI.5.19, XI.6.9-10) は同一物を指し, 「蔓」とも「葛」とも訳し得るが, 具体的には Nyagrodha の茎枝のこと

である。この樹(Aśvattha)は枝を下方に張って地面を覆う(cf. Kāṭhaka Upaniṣad VI.1, Bhagavadgītā XV.1 etc.) から、旅人は井戸を見ず、足をこれに絡ませて倒懸の姿態で宙吊りとなった。cf. E. Kuhn, *op. cit.*, pp. 69-70. Jaina 文献 (Sthavirāvalīcarita and Vasudevahiṇḍī) は明らかに *vaṭa*, *vaṭa-pāyava* としている。

(22) Bombay 版は *kūpa-madhya mahā-nāgam apaśyata mahā-balam* の一行を入れるも Poona Crit. Ed. はこれを採らない。但し, XI.5.20 c (*kūpādhastāc ca nāgena*) 及び XI.6.7 cd (*yas tatra vasate' dhastān mahāhiḥ*……) に徴して、むしろ Bombay 版の読みを尊重すべきである。因みにこの井戸の縁に在ってこれを覆う Aśvattha 樹と蛇との関係は *nāga-bandhu* (蛇の縁者)=Aśvattha によっても知られる。Cf. J. Ph. Vogel, *op. cit.*, p. 270.

(23) 「ゆっくりと葛木で蔽れているその(井戸の)周りを徘徊している」と解することも可能である。

(24) *majjanti* (溺)には恐らく <Pkt. *majjanti* (<Skt. *mad-*) の連想があるであろう。同類の Prakritism は *ucyati* (XI.6.5) にもみられる (Cf. Pali *vuccati*)。

(25) *antakaḥ sarva-bhūtānāṃ dehināṃ sarva-hāry asau* (MBh. XI.6.7 cd). Cf. J. Scheftelowitz, *Die Zeit als Schicksals-gottheit in der indischen und iranischen Religion* ((*kāla* und *zruvan*) (Stuttgart, 1929), *esp.* p. 18.

(26) 象を井戸の縁に置き、象の足に綱を結び、それによって井戸に降りる(懸垂)物語は *Tiriṭavaccha-Jātaka* (259) にもみえる。

(27) 「草に蔽れた井戸 (*kūpe vīrut-trṇāvṛte*)」の中に他人によって落された物語は *Devayāni* (MBh.1.73.18) 及び *Trita* (9.35.29) のそれに見える。前者に関しては M. Defourny, *Le mythe de Yayāti dans la littérature épique et purāṇique* (Paris, 1978), pp. 114 ff. 参照。

(28) 古い枯井戸に龍 (*nāga*) が住む (old disused well as haunted by *Nāga*) とす信仰については *Jarudapāna-Jātaka* (256) 及び J. Ph. Vogel, *Indian Serpent-lore* (London, 1926) p. 140 参照。

(29) 叙事詩に於いては一般に「草に蔽われた古井戸」(*mahākūpaṃ ivāvṛtaṃ trṇaiḥ* R.5.45.20) は「見えざる危険」「陥穽」として怖れられ、*trṇaiḥ kūpa ivāvṛtaḥ* (MBh.3.198.54, 13.147.11, R.3.44.10, 4.17.18), *channaṃ kūpaṃ trṇair iva* (MBh.5.39.35, O. Böhlingk, *Indische Sprüche* 2870), *kūpās channās trṇair iva* (MBh.12.152.16)

等の句は人を欺く詐欺師 (*adharmā dharmarūpeṇa, dharmadhvaṅga, dhvajin*) を型取り, 又時に能ある鷹の爪を隠すに似る (MBh.13.33.9) とされる故である。従って, 蛇の群り, 草の隠している井戸に落ちることとはそのまま死を意味していた。

Cf. *varam vindhyāṭavyām anaśana-trṣārtasya maraṇam varam sarpākīrṇe tṛṇa-pihita-kūpe nipatanam varam bhrāntāvarte gahana-jala-madhye vilayanam na śilād vibhramṣo vipulaokulajasya śrutavataḥ* (Cāṅakya-rāja-nīti-śāstra 5.43) (L. Sternbach, *Cāṅakya-nīti text-tradition*, I. 2 (Hoshiarpur, 1964), p. 135.

故に, 古井戸に落ちた身の救済はしばしば神仏への帰敬頌にみえる。

samsāra-kūpe patitaṃ yaḥ samuddharati dvijam pañcārtha-jñāna-hastena tasmai sad-gurave namaḥ (Ratnaṭīkā, GOS. 15, p. 2, lines 3-4).

jirṇa-kūpe mahāghore 'navagāhana-sāgare andha-bhūto 'smy ahaṃ nātha trāhi māṃ he tathāgata (Narakodddharastava 5, ed., by Chr. Lindner, AO. 40 (1979), p. 150).

- (30) 仏典の中でも古井戸 (*jarūdapāna*) は山中の嶮 (*pabbata-visama*), 河中の深み (*nadī-vidugga*) と並び称せられ, 「見えざる危険の場」として人の心して近寄らぬ (*apakassati*) ものの一に数えられる。

(Samyutta-Nikāya II, p. 198, lines 3-4. Cf. also A. F. R. Hoernle, *Manuscript Remains of Buddhist Literature* (Oxford, 1916), pp. 43-44.

この本来「危険の場」である筈の「丘井」が仏典に於いて「救いの場」となり, 旅人が敢てこれを求める設定となったのについて, 一つの解釈の可能性が残されているように思われる。MBh. XI.5.7 *sa teṣāṃ chidram anvicchan pradruṭo bhaya-pīditāḥ* は上に訳した通り「彼は彼ら(猛獣達)の隙を覗いて」とすべきであるが, *chidra* を「穴」の義と取り違える時, それは「穴を求めて」の読みに道を拓き, この辺りに伝承の別れ道が在ったようにも思われる。

- (31) Cf. J. Ph. Vogel, "The Man in the Well," p. 113 and Plates XXXIII and XXXIV a.

尚, *Mātaṅgajātaka* (497) の序文に語られる *Piṅḍola-Bhāradvāja* と *Udena* 王の故事一般については, G. P. Malalasekera, *Dictionary of*

- Pāli Proper Names* (London, 1960, second ed.) II, pp. 202-203 及び赤沼智善「印度仏教個有名詞辞典」(法蔵館, 昭42, 複刊) pp. 504-505 参照。
- Cf. also Khantivādi-jātaka (313) and Mahāvastu III, p. 357, line 3 ff. (E. Senart ed., 1897, *kṣānti-vādin*).
- (32) 西洋に伝わったものにも「野火」の項は失われている。松原秀一『前掲書』p. 127。
- (33) 長尾雅人訳注『維摩経』(中公文庫, 昭48) pp. 27-28 参照。
- (34) 「さんとすの御作業の内, 抜書」の中でも「深き穴の底にある大蛇とは……インヘルノ(地獄)の事也」といわれる。松原秀一『前掲書』p. 126。
- (35) Cf. J. Ph. Vogel, “The Man in the Well,” p. 112.
- (36) 例えば, 池田澄達『前掲書』pp. 191 ff., 岩本裕『『孟蘭盆』の原語について』『金倉博士古稀記念論集』(京都, 昭41) p. 385, 『地獄めぐりの文学』(東京, 昭54) pp. 225-6。
- (37) E. Kuhn, *op. cit.*, p. 70.
- A. Holtzmann, *Das Mahābhārata und seine Theile* II (Kiel, 1893), p. 205.
- (38) 拙稿「tapas, dharma, puṇya」『平川博士還暦記念論集』(春秋社, 昭50), p. 515.
- (39) For the meaning of *tantu*, cf. J. Gonda, *The Savayajñas* (Amsterdam, 1965), pp. 232 and 313.
- (40) Cf. U. Schneider, “Die Geschichte von den beiden Jaratkāru,” *WZKSÖ* 3 (1959), pp. 1-11.
- (41) MBh. I. 41 では *ākhu* の語が出るが, I. 13. 13 には *mūṣaka* の語が現われる。
- (42) この部分に関しては特に, F. Wilhelm, *Prüfung und Initiation im Buche Pauṣya und in der Biographie des Nārōpa* (Wiesbaden, 1965), pp. 18-20 and 38.
- (43) この黒白の色の象徴については, T. Goudriaan, *Māyā divine and human* (Delhi, Varanasi, Patna, 1978) pp. 169-170.
- (44) 尚, 「老(jarā)」が「日夜(ahar-niśā)」によって生類を切り崩しにかかるのは, 二人の男の曳く鋸が大木を削る如くであるといわれる。
- yathā hi nṛbhyāṃ karapattram iritaṃ samucchritaṃ dāru bhinatty anekadhā tathocchritaṃ pātayati prajāṃ imāṃ ahar-niśābhyāṃ upasamhitā jarā (Saundarananda 9.32).
- (45) この「歳」の象徴主義は古く Rig Veda I. 164 の「謎の歌」にさか

のぼる。この点については E. Windisch, “Das Räthsel vom Jahre,” *ZDMG.* 48 (1894), pp. 353-357, esp. 354.

(46) 尚, これに先立つ Upamanyu の物語, 就中彼の Aśvin 双神讃歌が参照されるべきである (60-70)。彼は Arka の葉を食して盲となり, 井戸に落ちた (so 'ndho 'pi cañkramyamāṇaḥ kūpe 'patat 1.3.52) が, Aśvin 讃歌によって視力を回復した (76)。この讃歌に関しては, L. Renou, “L’hymne aux Aśvin de l’Ādiparvan,” *A Volume of Eastern and Indian Studies presented to Professor F. W. Thomas*, ed. by S. M. Katre and P. K. Gode (Bombay, 1939) pp. 177-187.

(47) 「蜜をみて断崖を見ず」という表出は MBh. にしばしば現われる。例えば 2.55.4-5, 3.225.21, 5.50.26, 7.49.11, 7.108.10, 12.297.7。又, 「蜜」の語がなく唯単に「断崖」のみ出る場合にも, 好事魔多く, それと知らずに危険を犯す比喻となる (MBh.1.93.27, 5.53.6)。尚, madhu-prapāta なる合成語は「蜜の採集者を待ち受ける断崖」の意味となる (madhu-prapāto hi bhavān bhojanaṃ viṣa-samyuktam……āśīviṣaiḥ parivṛtaḥ kūpas tvam iva pārthiva MBh.12.83.45)。

Cf. also Saundarananda 11.29.

(48) G. Artola, “The oldest Sanskrit Fables,” *The Adyar Library Bulletin* 31-32 (1967-68), *Dr. V. Raghavan Felicitation Volume*, pp. 298 ff.

(49) *vidyā-jambhaka-vātika* (vārttika?) 意味を審にし得ない (*jambhaka*, Aufbeissen, Erklärung, Deutung BR.). 今は Nilakaṇṭha 註に拠る (*vidyā mantra-yantrādi-rūpā, jambhaka auśadhī-sādhanaṇi*)。

(50) 西洋に伝わったものと経律異相の「丘井の喩」では「丘井」の替りに「断崖, 深谷」が現われる。松原秀一『前掲書』pp. 97, 109 参照。

(51) madhu paśyati saṃmohāt prapātaṃ nānupaśyati (MBh.5.62.27 cd) madhu yaḥ kevalaṃ dṛṣṭvā prapātaṃ nānupaśyati (MBh.11.1.30 ab).

(52) Cf. M. Hara, “A Note on the Buddha’s Birth Story,” *Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte* (Louvain, 1980) p. 154, note 48.

(53) Cf. M. Hara, *op. cit.*, p. 149 and p. 155.

但し, 「断崖に宙吊りになっている (のにも気付かず)」(prapāte tvam lambamāno na vetsi vyagrān mṛgaḥ kopayase 'tibālyāt) という表現は, 同じく Vidura の Duryodhana への忠告にみえる (MBh.2.59.2)。

(54) 「草(木)=大地(女性)の体毛」については、

J. Gonda, *op. cit.* (Savayajñas), p. 330.

A. K. Coomaraswamy, "On the Loathly Bride," p. 356, note 11, in *Coomaraswamy, I: Selected Papers*, ed., by R. Lipsey (Princeton, 1977, Bollingen Series LXXXIX).

D. Dubuisson, "La déesse chevelue et la reine coiffeuse, Recherches sur un thème épique de l'inde ancienne," *JA*. 266 (1978), pp. 297-9.

Cf. also M. Hara "The King as a Husband of the Earth (mahī-pati)," *AS*. 27 (1973); pp. 98-100.

尚、毛髮の Symbolism に関しては、

J. C. Heesterman, *The Ancient Indian Royal Consecration* (s-Gravenhage, 1975), pp. 212-219.

P. Thieme, *Studien zur indo-germanischen Wortkunde und Religionsgeschichte* (Berlin, 1952), pp. 17-18 参照。

〔略号表〕 AO.: Acta Orientalia (Copenhagen)

AS.: Asiatische Studien (Bern)

JA.: Journal Asiatique (Paris)

MBh.: Mahābhārata (Poona Critical Edition)

R.: Rāmāyaṇa (Baroda Critical Edition)

RAA.: Revue des Arts Asiatiques (Paris)

TPS.: Transactions of the Philological Society (London)

WZKSO.: Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens (Wien)

WZKS.: Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens (Wien)

ZDMG.: Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft (Wiesbaden)

* 本稿は、昭和57・58・59年度文部省科学研究費補助金・一般研究(B)「Br̥hatkathā のジャイナ伝本 Vasadevahiṇḍi の文献学的研究」に於ける研究報告の一部である。